

「で？　どんな奴なのって。弟」

「うーん……俺達みたいな役じゃない奴なんだ。奏は」

「じゃあ何してるのよ」

「知らない」

「は？　あんたの弟なんでしょ？　向こうで一緒にいたんじゃないの」

「うん、一緒にいたよ」

「……なんで知らないのよ」

「ボスが何も言わなかったから。最初は隠してるのかと思ったんだけど、そうじゃないみたいだった」

「ふん。拾ったはいいいけど使えなかったんじゃないの」

「いや……最初から何もさせる気じゃなかったと思う。俺に身の回りの世話しかさせなかったから」

「ふーん……お気に入りってことね」

「それも多分違う。俺の弟になってからボスは定期的にしか奏に会わなかったから」

「もー……じゃあなんなのよ」

「俺の人格形成のため……？」

「は？　……もういいわ。あんたも知らないってことね」

「うん。端的に言えば」

「それで俺の弟って言うんだもんね」

「……」

茜がズッとコーヒーを飲むと、彼女のリップが紙製の
コップに形取られた。

「大体あたしになんの世話しろって言うのよ。自分の弟
ならあんたが世話焼いてあげればいいじゃない」

「うーん……茜は引くと思うんだけどさ」

「……なに」

「俺、奏と何度も寝たことあって」

「は？ どっちの意味で？」

「茜が嫌な顔してる方の意味」

「……信じられない。弟なんでしょ」

「うん。俺の弟」

「はあ……そっちの好きなら余計あんたが世話しなさい
よ」

「それでボスに離されたんだと思ってる」

「バレたってこと？」

「ボスにバレないことなんて何も無いさ」

俺は、世間の言う一口の量のコーヒーをやっと口へで
きた。

両手を使って、ぐりぐりと奏の腰を揺する。俺より体が小さいから簡単にそれができる。少しそうするだけで奏の中はすごく喜んだ。

「んん……あっ、あうっ……！」

「……奏のいいところあてて」

「んっ、んく」

やっと俺と目を合わせる。それは既にぼんやりとしていて潤っていて色気があって、俺以外に見せないでくれと切に願う。

俺の、弟。

「……ほら。どこ」

「あっ、や、やだっ……だめ」

「自分でしないなら押してもいい？」

「だっ、だめ！ わか、わかった……」

そっと奏の腹に右手で触れると手首を掴まれて拒否された。俺は手持ち無沙汰になって奏の太ももに手を添えた。

「んっ。んう……ふうっ」

「……っ」

ぐぐ……と股を開いて、俺から少し抜く。きゅうとそこが締まりながら抜けて気持ちいい。

「ふう、ふうっ……ううっ」

またもや目を瞑ってしまって、俺の好きなあの瞳が見られなくなった。

「ンン、んく、んっ……」

ずり……ずり……と先端が奏の腹の中をなぞる。ピリピリとした快感がそこから生まれる。奏は俺に言われた通りに何度もそこを探した。俺と奏が離れるたびに粘り気のあるローションが何本も糸を引き、くちゅりくちゅりとイヤらしい音が部屋にこだました。

「あっ、ああ……っ……。こっ、ここ」

「……ん。突いていい？」

うりゅ、と瞳にそれが溜まる。奏は返事をせずに俺と

唇を合わせた。